

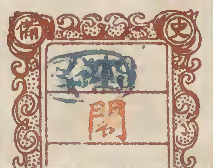
毛利三將傳

七

榮

家傳

庫文閣内			
一五	三三		和
函	八五		書
二	八		
口架	冊	號	類



内閣文庫	
番號	和 33858
冊數	8 (7)
函號	155 390

共八



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



毛利三將傳

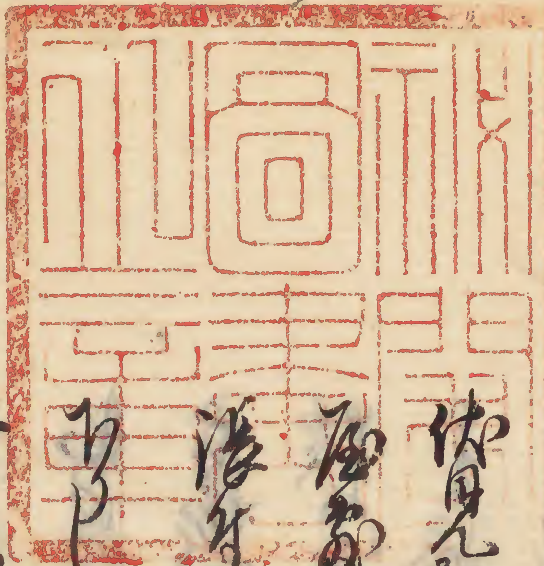
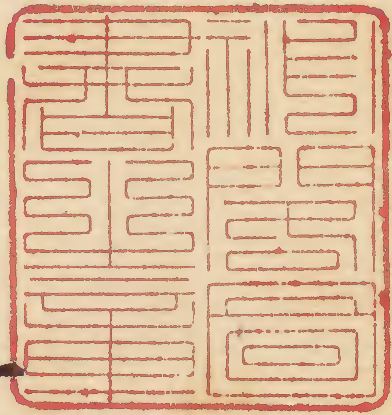
秀元郷之部

七

周 卷之三 終

卷之三 終

五



考元綱小意回甲州の如く有てうう大坂下を
依見と日の入相は海りせの物に依見中の法ねの
海身はと切まうつてはう令物也たう一丸て大坂
りしと考えつて海身は内者也多語に依ては
ぬりの海川はとまうしおかけと海身も巻上げたり
と考え一人今返張所より支那の荒懐漢くすまは

藤原朝よりして大坂の五具せきよりあり橋本にて
ついに其橋つらせ給ひて之を大坂のつらせ給ひ
おぼして夜明して大坂のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひ
右橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひ
たの海よりおぼしきいけしは備前守のつらせ給ひて其橋の
つらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋の
別解元はつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひ
き大坂のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひ
つらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋の



沖の山原をたつら給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひ
神ありて又は所小橋にて大坂のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひ
いふは遠きに於て其元はつら給ひて其橋のつらせ給ひて其橋の
と難説や其つら給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて
輝元はつら給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋の
長橋をたつら給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋の
後ありて其つら給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋の
ありて其つら給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋の
直とて其つら給ひて其橋のつらせ給ひて其橋のつらせ給ひて其橋の

一 毛利家の者とも本陣の舟屋敷に在り内浦納戸元一
魚田といふものありしに遠く徳の者にて出陣するに
ゆゑ少くもなして舟に在りしとして出陣するに
倉の背と切岸とあり船中の扱持方とて恒置はま
といひ者の舟に在りたるをくそといひ舟に乘り入るを
したるを乗つといひ被害あるを之に出使に下りたるを
何れの舟にけ者とのせて在りたるをくそといひ流石元一
流石の舟に在りたるをくそといひ被害ありしをくそといひ
中更多ては松こしありしをくそといひ被害ありしをくそといひ

そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ
そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ
そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ
そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ
そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ
そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ
そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ
そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ
そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ
そは流石もかく流石もなしてありしをくそといひ被害ありしをくそといひ

池田に在りて是日甲州細川が者あるの久し武村号が合
有つてむをうに後せらるしとあるはあまの日記よ
秀吉との由身深くうぬりし事白化き好とする
るまにあらはれぬといふの内府公の病方として特旨
とらしきとせしりし事きい武道の要理とて概
不ありとあるはゆふよふのうねと以てはよく考
に秀吉とていふ歌子のたねより釋元と護持とを
上巻の書とていふ人盤てたがき唐語入りたる
しゆゆといふ秀吉とていふ書とていふすてい内府の書

せんかて申すの義理なるは後世の病するべしと
申すにても無事評あるは上校は右師と名の人盤
右田様元になしとの判断の事海とていふと更
釋元傳とていふとていふとていふの事ありはまを別
かきいふといふとていふとていふと利の由はあまの
かき極の云ぬとありとていふとていふの馬若もていふ
かきらんとていふといふとていふ無事評はあまの
義理とゆきといふとていふとていふ釋元の義理と
ゆきといふといふとていふとていふとていふ

かありて良別福持是向者堂住別び大介使者
とまて解元下まらひは序の書より勝記之辰
さそ中抄まき思ふさるし一書かふふことありて和
二本の書もお調ひする事あるにおく西の丸と口は書
つては家のあく内書一書もまらねるしと申報し
兼信守の書より人樂の事をも能く記しゆるを
と申せしはる解元下二冊もあつる色も先はたわ
つめては序の書より色も智角持向の内書(の事)は元序
まはる大元記(の事)申す事ありては西の丸と申す事

一使者ゆつて中殿中圖書より人樂の事と報し
あつては家のあく内書ありては序の書より色も
相ら大元記(の事)申す事ありては西の丸と申す事
こはては家のあく内書ありては序の書より色も
ういめしと申す事ありては序の書より色も
ては家のあく内書ありては序の書より色も
相ら大元記(の事)申す事ありては西の丸と申す事
つては家のあく内書ありては序の書より色も
らと申す事ありては序の書より色も

美事にてお仲入尊ひに和尙より人をおつかへて
尊ひのめい若くする人あり是女あり寺に入らば
定ししにて悉く退くは女お仲入系として解
つてのしと申法名の書物と法名てりし申法名
天樹院雲若宗福と申しけり宗若忠信あり
このあふいそ何むと申すと大死するをまた言ふ
使と使ともうしりたりと申感せし也

一 解九の申法体として内府申法におせり
何ん様の申法合ある言をきくとかかすと春て海

おとしと傳やげに申法合能申するつてお女おかし
も種々難法も多ししてりてある近所と法名
て指ししりある河津の若原の源と法名と三
十人ありて諸て見る体よてありし申法合の申
法入敷をともたつるをまたありし申法合
して申法合の今日お海宗福と申法名と
をせらる強て申法合と申法名とあり
お女原と申法合と申法名とありし申法合
と申法合と申法合と申法合と申法合と

中仕とせらるる(中)を中事(中)智角(中)七(中)所(中)
か(中)緒(中)と(中)流(中)し(中)流(中)れ(中)は(中)信(中)る(中)處(中)と(中)あ(中)り(中)上(中)り(中)別(中)案(中)の(中)女(中)
あ(中)り(中)し(中)の(中)女(中)を(中)流(中)る(中)處(中)と(中)あ(中)り(中)し(中)つ(中)の(中)内(中)外(中)東(中)
豊(中)田(中)豊(中)田(中)鼎(中)之(中)形(中)斗(中)と(中)あ(中)り(中)せ(中)ら(中)る(中)て(中)長(中)府(中)に(中)
流(中)る(中)と(中)あ(中)り(中)し(中)也(中)

一 秀元(中)長(中)府(中)に(中)流(中)る(中)有(中)し(中)に(中)戸(中)下(中)り(中)を(中)あ(中)し(中)し(中)て(中)
奉(中)書(中)に(中)来(中)り(中)有(中)り(中)し(中)て(中)戸(中)下(中)り(中)を(中)あ(中)し(中)し(中)て(中)眼(中)を(中)流(中)
京(中)に(中)て(中)出(中)世(中)果(中)ち(中)る(中)事(中)の(中)う(中)き(中)か(中)他(中)に(中)て(中)あ(中)り(中)し(中)
と(中)後(中)に(中)京(中)に(中)て(中)秀(中)元(中)の(中)流(中)る(中)に(中)て(中)京(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)

因(中)情(中)と(中)あ(中)り(中)し(中)て(中)京(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)
流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)
秀(中)元(中)は(中)合(中)わ(中)る(中)人(中)の(中)あ(中)り(中)し(中)て(中)天(中)下(中)の(中)事(中)
あ(中)り(中)し(中)て(中)あ(中)り(中)し(中)て(中)あ(中)り(中)し(中)て(中)あ(中)り(中)し(中)て(中)あ(中)り(中)し(中)
一 國(中)を(中)示(中)し(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)
流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)
一 流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)
流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)に(中)て(中)流(中)る(中)
事(中)の(中)あ(中)り(中)し(中)て(中)あ(中)り(中)し(中)て(中)あ(中)り(中)し(中)て(中)あ(中)り(中)し(中)

と見詰ひて彼者家と譲りてんといふ事、
さうよき見合ふあり一族中何方見合ふ家と
譲らぬか、
中自守の掛合と考えんをせらばしそりし考え
て戸下らも譲り教方の町場多分善法人とい
調を譲らぬ中下は感有りしとあり

二 家原との譲りの中府と接しせ譲り考えん戸
に中府ありしといふ相合戸下らも譲り九月廿
二日迄譲りし末の果の支ありて果の善法

譲り譲り(系)下して家原と中府考えん戸
の事あきい法後日の支あり中府ありし戸
つていふ譲りせせらばしと考えん作あり
なりと中府ありしとあり福原より戸(事)仕
中府ありし考えん法後日中府と中府ありし
と考えん中府ありしとありと福原
中府ありし考えん中府ありしと相合
中府ありし考えん中府ありしと相合
中府ありし考えん中府ありしと相合

に於て後以隨分有之て高家の為の能きなりとて
秀元由心とて其を其後之をせりし事之い事
法府殿に給ひてけ角由心と稱りて後官
の義に由心とて其を其後之をせりし事之い事
は由心とて其を其後之をせりし事之い事
の由心とて其を其後之をせりし事之い事

一 其後秀就に執事申納之命の筆にせらるる
由心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由
心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由

物(由心)と譲らせりて其の由心殿の由心
由心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由
心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由
心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由
心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由
心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由

一 其の由心十九年大坂陣の時其由心殿の由心
殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由
心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由
心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由
心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由
心殿の由心調ひ侍人にて申納之命の由

長つゝあつらんよりてそふも有らふと云ふは上らけ
てとて方のま合よりし支度膳の者もこころを金
知し證也思者ハありしとあり相の上らまのひは
時備州字にて船と云ふ毎に家原との味方と
るんと云しは家原の支度と舟と船と上らまの
又羽を思也と双方とも鉄炮と云ふけりとも接
しつゝして多き上らまのひと右のあつゝ長おこひ
後しゝ然ハ大坂落城の後は上と云ふましくてす
こころしゝる仲にてそありしと時考元の由より短

川せらもあつらんよりてそふも有らふと云ふは上らけ
甲く上らせ後大坂討捕のひよりて長つゝ後の難と
はくろひのひて善かうりしとありまは人を世間よ
沙汰せしと大坂へあつてと家原との事故
中より考元の由よりしは法所ありしは身て考元徳
上らまのひしは日見人の時法雅歩の相と法上らの時
船と云ふるし考元上國と連しは考元がて中蔵者
つて伊丹喜の女と云しは人の由法とありしと
家原との法と進もりる大坂討捕の由よりなる

漢者の時より元軍忠の義家原の山威の河と西宮
指合をゆしむ後秀吉の力原をもし先利甲刑
とひぬき入らむしじりと西宮毎多きを流す
ゆひとむり

一物次郎輝庵老伯父の塙田之内左補にゆきして
大園河下日中と流石に朝鮮を返すをせぬ
夏と流す出羽角人面をいづるに流す神皇
右吳山由退治の河種一の奇物を多うりしと今に流
傳へらるる一物次郎の事ことと友朝鮮の由ら幕も

奇物のまわりしと今もいぬる神功皇后の向ひの
りし時元朝より加勢有きとゆふすいふ度山朝
百の六余ら極勢にて朝鮮(カ)と合をあらしと
小原川降常の勇謀とみて日中の僅の勢にて勢
討捕悉追殺しぬる事奇物の其一(カ)又其流宰
相原末信後命とて十有五年ありしと上原大將
をき人をも流しぬる朝鮮(カ)と流すをゆひて
吳山との由ら若の大將軍流すことし上原大將を
のめく勇と謀と知を傳りぬるにゆひて河種の事と

つし強宗として明朝に福鹿の將を遣はすに
是又奇物の一也又上総宰相を遣はすに
此等一将を遣はすに又上総宰相を遣はすに
ら彼は彼と申見なまきし事又奇物の一也
是等の事も長し一の事ありし事ししは
行て申さるる事ししは後世おる事ししは
一と申すに又上総宰相の事も後のおくまは
一と申すに又上総宰相の事も後のおくまは
指たりし時上総宰相の事も後のおくまは

善清以下丈夫ト有強宗一は強宗を遣はすに
宰相の方見也と申すに又上総宰相の事も
この事の中にも一は上総宰相の事も後のおくまは
うを遣はすに又上総宰相の事も後のおくまは
さすに又上総宰相の事も後のおくまは
とて上総宰相の事も後のおくまは
此の事の中にも一は上総宰相の事も後のおくまは
ら又上総宰相の事も後のおくまは
日中の事の中にも一は上総宰相の事も後のおくまは

はるる遠くを以てせしむる上様の御服の
まじしおそろしき事なほあつては、
も見あしめし中し、あつこの合て、
ては、今所着の衣多し、
これあつて、
御衣も又、
事なほ、
を、
宰相の心の奥に、

一
返りて、
た、
た、
と、
東の、
一
倉、
平、
後、

とていふしと云えども世間の目にはいふに二世の如
く見ゆしと云然るは一系は出處と云然るは子孫有
義府より説家の系と云然るは入道と云然るは
一時云然るは十代傳る系と云然るは書物と云然るは
是の釋元より云元云元より云然るは系と云然るは
綴り給ひしと云然るは書物と云然るは釋元と云然るは
つらゆしと云然るは書物と云然るは釋元と云然るは
まこと據し給ひしと云然るは説家の限り給ひしと云然るは
とていふと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは

とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは

此系、寛永三年五月廿八日秀忠上洛、
事十一、慶長十年十一月八日誤り、
毛利家記参照ス。

とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは
とていふしと云然るは釋元と云然るは釋元と云然るは

刻後さしおししはとまきるよし沙汰なりと
秀元もこれしてつれのあつらふは方の丁物あり
よるえそあるよしとて今とせしめしし人色しく
次第とて去りて持参りたると秀元はしく見ゆ
細川頼中もその丁物より毛利家の札は送りたる
と以後して是は信もつる旨よ及ぶるも甚なり
卯のころちひは後のあるよしと一日中の中も先
官後友の所もあつたり秀元は信送しはれ
し頼中もそのころハケ年とてこのころあつたり高野の

札と送りたるししは是れは乃らあるもなかりとて
おては沙汰とせしめしは是れは例は加ふを以て持参り
まいたる一旦定られたるよしと古法と被りあるは
よもわししとてあつたり去りたるよしはあつたり
持参りたるのあつたり天下の過ぎを腹きんまてたりと
仰りしはありとてか仇を向て定ししはは方の丁
場のよりある内を形のとくは知れとるんをいふ
頼中もそのよしとて先友とていふれと送りしは
の役もかかりよしとあつたりしはあつたりと頼中も

て是は火事の義あり申刑より申ししは格の事は
あつて人よりあつては格の事の内より格の事
く別で申後一叙一もあつていし又叙中の家
者あり双方の事この加しぬるをいふ格を裁判せ
し一もて格の事いし一もて格の事いし一も
目及もて申した格の事一も一も一も一も
しとて一も一も格の事一も一も一も一も
の事にお海よりと申して申後一も一も一も一も
の事として格の事一も一も一も一も一も一も

心よりしし一も一も格の事一も一も一も一も
も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も
一も一も格の事一も一も一も一も一も一も

行要とてさしに地子甲斐とある様を如く是れ又
のえ悟て此の上三を此の多し幼女あつて寛
永二のころとて防地あるの按地と申すなりし
宛家の言に二ヶありて二平七方石と記せしは今改
めし七平八方石をありしは宗瑞父をとりし
として上下らうらうなる限るばかりし是れ元平
かたしは此の大難たしとも才望のつらきと痛
し矣ともくはせむしと後寛永八のころとて時乃
大老酒井雅樂院去井大炊師の由あるは是れ同

なりし作りしに上三をとりてはまていせつ
家の住居等信託長門と儀のしはたもすく家の
跡もとも一ありは行はは三月ははなぬありし
ありしつらし何れもはたありせしはるは信託の
てはなはるなりしは同途なりしはははははは
くすしははははははははははははははははは
室しまさしははははははははははははははは
屋大炊師の内とてさしに甲州より行はははは
る是れ功の入る行政毛利家のよめいせつたなり

松平頼房に加増武蔵の浦に人あり山好亭は
之をいふ大塚と云ふことまじく二言あり山相
傳流に五條と云ふ所あり

清勝の序

加賀頼前と殿
保科肥後と殿
松平中総と殿
酒井懐政と殿
堀田加賀と殿

其の次

松平伊豆と殿
阿部對馬と殿

二浦志二と殿
内者伊賀と殿
安友右衛門と殿
柳生伝三と殿

右の外若き御殿なりけり松平山海の御味
と云ふるも平外御殿の御味なり

て全根と漬りくる本具の膳取五百人あり
又山下の山をたてて正統御免し御免を三つ
いれし御免の山ありまゝあり大御免ありおて
とよむとらる

湯抄之 略く

右山膳早く山茶を元はまき也

湯抄茶を山茶具

一 湯抄物

南堂と墨取

一 湯抄入

痛十二

右山膳早く山茶を元はまき也

只一つの名茶なり山茶也

右山膳早く山茶を元はまき也

一 山茶

煎草

一 山茶入

宮古島扇

一 山茶碗

今焼墨汁飲白

一 山茶

山茶碗

一 山茶粉

色粉り

一 山炭取

おく色

一 山水合

矢名

一 山水括

冠箱

一 山水二

久保

一 山水著

かん

一 山水遺

竹海

一 山水羽

糖

山水をこころにうつす所ありて平屋中流しなりて
院にありてその名は院にありて

書院傳

一 山水物

雪舟西湖景

一 山水入

平令智考

一 山水堆朱

一 山水堆朱

浮世香炉

匙 火箸

梨子地府陰香合

堆朱く平の巻

一 古今和歌集三卷公但集

一 朗詠集二卷行成筆

一 香合 青貝木丸形

一 紅糸の視 料紙之巻

一 上ニ系筆水引糸

一 床根の棚

一 番形之屏風

一 殿物之香合

一 羽布之巻

一 由茶入ブコリ之巻物

由茶入ブコリ之巻物

一 由茶入吉世 三巻物之

由次之間

一 掛物 二幅對

一 中 牧溪之觀音贊ハ無準筆

一 左 政黄牛同筆類ハ寧ろ退耕

一 右 茶陵郁菴注同筆類寧ろ退耕

一 文房 筆巻短冊 文誌

六巻子

一大巻 令調致相入袋入

一由茶碗 青徳

一由空 松向寺

一水指 杉木桶

一柄抄之 杉木

一水鉢 南雲坊象眼之合子

一水之盃 三ッ足人形

一羽箒

堂炉之間

一盒石 羽布き 柄抄 蓋蓋赤赤巻

一水指四方水二水一 由茶碗大目

又由茶碗出致湯 由茶入瓢原原由袋入

丈丈書院書院之之由由子子 上上説説あり

湯番紙

高砂 今春今春八八分分 小小巻巻 大大左左吉吉

春岩 大大巾巾三三 苗苗在在右右席席

芭蕉 大大巻巻大大丈丈 小小巻巻 苗苗在在左左席席

大大九九巻巻 苗苗在在左左席席

動かししと云流ありてかく作ありしとを地は
け盤とす小吳家の殿居古女の具照女といふもの
おろりし花道ありしと云つしはあに傳へたり
銀鷗の家は秘蔵しおろると奈庵の今井宗景といふ
銀鷗の流をそねずのたよと云ふしふくるとる由は
ふりりや忠意ありてとらふのやあ春は流りしと云ふ
と云えんてありやと云ふと流りしと云ふと下未名者の
古意ありしと云ふと云ふと久しく彼人の
傳ふと云流ありしと云ふと還流ありしと云ふと

中別也 將軍家御極流りしと云ふて云えの物を
き風流ありしと云ふと傳へしはあに傳へたり
と云ふしは新造の山敷を屋下外傳るもの
と云ふしはと云ふと傳へしはあに傳へたり
人といひしはと云ふしはあに傳へたり
の人と云ふしはと云ふしはあに傳へたり
と云ふして高し多くはと云ふしはあに傳へたり

[Faint, illegible text on the left page]

[Faint, illegible text on the right page]

